

理学部は今

No.17 March 2007

理学部のホームページ <http://www.sc.niigata-u.ac.jp>



昨年10月3日に第1回「留学生を囲む会」が後援会ので支援の下、多数の学生と教員が参加して開催されました。理学部で学ぶ留学生はまだまだ少数ですが着実に増えています。留学生によるスピーチ会に引き続き、留学生を囲んだ懇談会では総勢60名以上も集まり、楽しい懇談の一時を過ごしました。

今後も、理学部ではこのような国際交流活動を重視していきます。

第一部 留学生スピーチ会:16:30～17:40

理学部合同講義室にて(写真左上)

第二部 懇親会:18:00～19:30

大学学生食堂にて(写真左下/右下)



Contents

■特集記事

理学部長再任の挨拶……………2

■学科ニュース

数学科……………2

物理学科……………2

化学科……………3

生物学科……………3

地質科学科……………3

自然環境科学科……………3

■附属臨海実験所ニュース……………3

■転任教員紹介

物理学科 助教授 宗 博人…4

■退任教員紹介

化学科 教授 橋本 哲夫…4

化学科 教授 三沢 正勝…4

地質科学科 教授 加々美寛雄…5

自然環境科学科 教授 増田 芳男…5

自然環境科学科 助手 関谷 國男…5

■新任教員紹介

数学科 助教授 蛭川 潤一…5

■卒業生からの言葉……………6・7

■改修工事……………8

■これからの行事予定……………8

理学部の現状

一校舎の改修と高大接続事業一

4月から2年間、引き続いて学部長をお引き受けすることになりました。皆様のお力添えを得て、なんとか職責をまっとうしたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

国立大学法人が発足して3年が経過し、中期計画（平成16年度～21年度）の中間点にさしかかりました。最近の理学部の動きについて、今回は紙面の都合上、2点を後援会の皆様にご紹介したいと思います。

【校舎の改修】まず最初は理学部校舎の改修についてです。平成14年度に理学部校舎（A棟）の一部の改修工事が行われましたが、その後、文部科学省の予算が減少したため、改修工事はストップしたままでしたが、平成17年度に本学の予算を投入することによって、C棟の一部の改修が進みました。平成18年度には補正予算によりA棟の残りの部分とB棟が改修されることになりました。更にC棟についても引き続いて学内予算で改修が進んでいます。平成19年3月末までには、これらの工事は全て終了し、平成19年度の新入生をリホームした校舎で迎えることができるようになりました。しかし、C棟の約60%はまだ未改修のままであるので、平成19年度においても、C棟の改修が進むように大学に対して要望をだして行きたいと考えています。限られた学内予算によって少しずつ改修工事が行われるようになったのは、大学が法人化されたことにより、大学の裁量によって学内予算を使用できるようになったからです。校舎の改修には、実験室、講義室などの設備の更新も含まれています。たとえば、今回のA棟の改修工事では、理学部学生用コンピュータ・マルチメディア教室が整備され、50台のコンピュータが新たに設置されるので、数学科の講義だけでなく、全学科の学生にとってもおおいに役立つものと思っています。

【高大接続事業】平成18年度の理学部入試における志願倍率（前期日程）は2倍を下回りましたが、平成19年度は2倍を超えました。このように低倍率時代を迎えて、理学部では理学の普及とあわせて理学部への志願倍率の向上を目指すことを目的として、高大接続事業に力を入れて取り組んでいます。その主なものは、県内及び隣接県の高校訪問（平成18年度は34校を訪問）、SPP（サイエンス・パートナーシップ・プログラム）の実施、オープンキャンパスの実施等です。SPPは高校生が、大学での講義や実験を経験することによって、理科好きになってもらうことを目指した事業です。昨年8月に実施されたSPPでは、6学科で12講座が開講されました。これには県内の3つの高校から80名以上の高校生が参加しました。理学部独自のオープンキャンパスも、昨年度に引き続いて平成19年3月に開催予定です。これらの高大接続事業の展開が、高校生の理学部に対する理解へと結びつくことを期待しています。



理学部長 周藤 賢治

学科ニュース

数学科

今年1月1日付けで、数学科に蛭川先生が赴任されました。学生と10歳ほどの年齢差なので、学生も親しみやすく、数学以外についての相談もしやすいのではないかと思います。

数学科では、年に2回（前期と後期）、理学部後援会の援助を頂いて、数学科講演会を行っています。後期は、数学科の卒業生をお二人お招きして、企業への就職や、教職について、いろいろなアドバイスをいただいています。

昨年11月12日に国際情報高等学校教諭の長谷川孝さんとアドバンエンジニア株式会社の早川俊さんに講演をお願いしました。

長谷川孝さんには「高校教員を選択して思うこと」という題目で、教員の仕事や教職について思うことなど、生徒とのかかわりなど具体的なエピソードを交えてお話していただきました。また、早川俊さんには、「夢を持った生き方」という題目でお話していただきました。早川さんはアマチュアですが将棋で全国3位になった方で、将棋の話も交えて、仕事や人生のいろいろな場面における選択について話していただきました。

また、学生用の図書の補充、オープンキャンパスや数学科研修での教材の購入のため、後援会の多くの補助をいただきました。心より感謝いたします。

物理学科

昨年の秋冬は、県立自然科学館で2つの展覧会の開催に協力したり、新潟大学Week企画として小中高校生や一般向け展示を行ったりと、物理学科では啓蒙活動に随分と力を注いだ季節でした。「アインシュタインLOVE展」（9月9日から10月1日、於県立自然科学館）は、物理学の偉人であるアインシュタインの豊かな人間性と偉大な業績を一般向けに展示する世界巡回展で、内田エネルギー科学振興財団の多大なる協力により、日本海側では唯一ここ新潟で開催されました。物理学科も全面的に協力し、アインシュタインの三大偉業である相対性理論やブラウン運動、光電効果をやさしく解説する展示を行いました。この展覧会には多くの訪問客が訪れ、物理学科展示も小学生にも好評でした（写真参照）。11月3日には新潟大学Week企画「みてさわって！アインシュタインと物理学最前線ー物理学科の設備を使う楽しい実験とやさしい科学解説ー」を実施、50名近くの地域の方々、子供達、さらには、理学部物理学科の受験を考えている高校生まで訪れてくれました。アインシュタインLOVE展の出し物に加えて出展したマイナス200度体験コーナー（液体窒素を用いた実験）や空気中のアルファ線を肉眼で確認する小瓶（霧箱）などは小学生にも好評で、子供達が物理学に関心を寄せてくれたことはなによりも心強いものでした。「ニュートリノ展」（12月16～28日、於県立自然科学館）でも物理学科の教員・学生が協力し、最先端研究の紹介が行われました。恒例となった企業見学会（第4回）は、2月21日、理学部後援会の協力を得て長岡市の（株）アドテックエンジニアリングを訪問しました。



化学科

2006年12月2、3日、毎年新潟県内で行われている有機合成化学協会・関東支部シンポジウムが開催され、その運営を本理学部化学科の有機化学を専門とする教員が中心となっており、多くの教員と大学院生の協力のおかげで無事に運営することができました。当日は厳しい寒気が入り、寒さに強風とみぞれ混じりの雨といった新潟特有の厳しい天気の中、多くの教員・学生の方々が新潟大学まで足を運んでくれました。本学からの発表者の中からは、須貝さやかさん(大学院自然科学研究科修士2年)が大学院生を対象にした「若手講演賞」を受賞し、本学の研究成果をアピールすることができました。

化学科の大学院組織である大学院自然科学研究科・自然構造科学専攻の化学分野では、修士論文発表会が2007年2月9日に行われ、修士2年の学生25名が研究成果を発表しました。本年度の修士2年生は人数が多く、発表会を8時45分から18時までと長時間かかりましたが、時間を越えることなく無事に全員の発表が終了しました。



理学部内の改修工事が進んでおり、化学科の教員が使用している研究室付近では至る所で工事が行われており、通行止め等により棟内の移動が不自由になっています。改修により建物内の雰囲気明るくなるには、もう少し時間がかかりそうです。

生物学科

昨秋始まったA棟東側改修工事にやや遅れて、B棟とC棟東側2・3階部分の工事が年明けから始まりました。これに先立つ11月末に生物事務室と一部研究室は一時避難先に引っ越し、生物図書館の図書のうち使用頻度の高いものは理学部図書室へ移動させ、その他は箱詰め一時保管し、学生用パソコンは生物第2学生実験室に移動しました。B棟2階の生物第1講義室・第1学生実験室は1月から使えなくなりました。2学期に第1講義室で開講されていた講義は代替の講義室で実施され、第1学生実験室はこの時期使用しないため、重大な支障はありませんでしたが、生物第2講義室・第2実験室での講義と実習では、工事の騒音・振動などでご迷惑をおかけしました。また、一時避難先として使うために2・3年生用の学生控室が使えなくなったこともお詫びします。新年度にはB棟の新しい講義室が使えるようになるとともに、C棟東側奥が生理系と形態系を合わせた新しい学生実習室となる予定です。例年B棟3階の合同講義室で行っていた4年生の課題研究発表会も、



物質生産棟1階演習室で2月7日に行われ、27名が日頃の努力の成果を発表しました。

地質科学科

今年は異常に暖かな冬で、新潟市内はまだほとんど降雪がありません。このまま春を迎えることになるのでしょうか。もう30年以上も昔のことになりますが、その頃「氷河時代がやってくる」といわれていました。現在は「地球温暖化」が問題になっています。炭酸ガスなどによる温室効果が予想より早く現れてきているのでしょうか。地球規模の数～数10万年を周期とする気候変動サイクルとの関係はどのようになっているのでしょうか?近い将来どうなるのかはもう少し様子をみなければなりません、現実には異常気象とかいろいろと良くないことが起こってくるようで心配です。

地質科学科は、昨年9月以来半年間せまいスペースでがまんしてきましたが、3月末には理学部A棟東側の改修工事が終わり、いくらか使用面積が増えることになっています。今回の改修の目玉はA棟東側の1階に新しくできる標本室です。いままで埃にまみれていた化石・岩石・鉱物標本を整備し、本学の学生・教職員だけでなく、一般市民や小学生～高校生も楽しめる場所にしたいと考えています。ただし展示の準備に時間がかかります。夏のオープンキャンパスまでには間に合わせたいと思っています。

3月末に、加々美寛雄教授が定年退職されます。また、技術補佐員(岩石薄片作成担当)の山崎陽子さんがやめられます。これから数年後には地質科学科のスタッフの約半数が入れ替わるはずですが、そのさきがけともいえます。3月17日(土)には加々美先生の最終講義と記念祝賀会が予定されています。

自然環境科学科

自然環境科学科では、2月13日(火)10:00-15:30、自然科学研究科管理棟大会議室において、2006年度課題研究口頭発表会が行われ、4年生25名がこの一年間で取り組んできた課題研究の成果について発表しました。一年分の成果を僅か10分ほどの時間に凝縮して発表することに、皆四苦八苦してはいましたが、最終的にはどの発表も中身の濃いものに仕上がっていました。またその翌日には、同じく管理棟の中会議室において課題研究のポスター発表会も開催されました。会場の都合により本年度から学内での平日開催となりましたが、会場には本学科の学生以外に卒業生や父兄、他学部の学生なども集まり、研究結果に関して活発な議論が行われていました。さらにその二日後の16日(金)には、同じく大会議室において修士論文発表会も開催され、10名の修了予定者による発表が行われました。

本年度は、長年、理学部の教育と研究に尽力された増田芳男先生と関谷國男先生のお二人が退職されますが、その最終講義が2月23日(金)に行われました。増田先生からは「40年を顧みて」、関谷先生からは「『たかがカエル、されどカエル』とつきあって」という題目でそれぞれお話がありました。卒業生も多く駆けつけて、皆先生方の興味深いお話に聞き入っていました。増田先生、関谷先生、長い間有難うございました。

附属臨海実験所ニュース

附属臨海実験所では、毎夏、全国の国公立大学の学部2～4年生を対象とした公開臨海実習を実施しています。昨夏は、東邦大学理学部の風呂田利夫先生を協力教員としてお招きし、8月27日から5泊6日の日程で開催し、北は北海道大学から南は琉球大学まで、全国の大学から総勢17名の学生が参加しました。参加者は、風呂田先生のご専門である海洋生態学の視点に基づいた調査、実験所周辺の荒磯における海洋生物の採集や観察など、様々な実習項目に熱心に取り組み、海洋生物の系統分類や多様性に理解を深めました。この様な実習は、新潟大学に限らず、国立大学法人臨海臨湖実験所長会議をネットワークとして、主に理学系の臨海臨湖実験所(センター)でも開講されています(詳しくはホームページ: <http://www.research.kobe-u.ac.jp/rcis-kurcis/station/plan.html>を参照してください)。それぞれの大学に属する教員や協力教員の専門領域により、進化学、生態学、系統動物学、発生学、生理生化学、分子生物学といった、極めて多様で特色のある実習内容が盛り込まれています。理学部学生の皆さんも、是非、他大学で開催されている臨海臨湖実習に参加し、他大学生との交流を深めながら、生物学を楽しく学んでみては如何でしょう。なお、平成19年度の佐渡臨海実験所での公開臨海実習は、米国・ニューハンプシャー大学よりStacia A. Sower教授をお招きし、8月20日より6日間の日程で開催する予定です。



磯採集に向かう実習参加者(上:前列中央が風呂田先生)、生態学的な調査に取り組む学生(下)

転任教員紹介



オレンジのチームからミカンの土地へ

愛媛大学大学院理工学研究科 教授 宗 博人

2006年10月1日付で愛媛大学へ異動となった物理の宗です。新潟大学には、結局19年半、お世話になりました。大学から見える日本海と佐渡島、そして角田山、弥彦山。自然がいっぱいのこの環境で過ごしてきました。

4月には寒すぎる花見で始まり、雨があまり降らない梅雨だなと思ったら、いきなりのフェーン現象から夏へ突入。何でこんなに気温が上がるの?と最高気温を気にしながらの前期試験。9月には涼しい風がたまに吹き始め、慌ただしく後期が始まる。雨が多すぎる記憶しかない秋から、冷たい風が痛い冬への突入とタイヤ交換の季節。タイヤ交換が終わると、雪が降るペースがぐっと減り、肩透かしを食らいながら年末へ。気が向くと年始に弥彦神社に行き、人ごみの中でいつも通りに連れとはぐれる。年度末の本当に忙しい時期を過ごすとし新しい年度の開始と桜の季節へ再突入。これを19回繰り返してきたんだと今この原稿を書きながら、少し感慨深く思っています。

今まで、僕は同じ処にこんなに長く居たことはありません。実際に、小学校を卒業するまでに(言葉が通じない所に)3回

引越しをしました。

従って、新潟は第二の故郷というよりも事実上の故郷と言ったほうがいいかもしれません。この間、いい事ばかりでなく、喜怒哀楽のすべての感情を(教育者、研究者として失格かもしれないけど)深く味わえました。また、最後の3年間は新潟でアルビというJ1チームを見続けることができ、悔しい感情も一杯あふれましたが、歓喜の瞬間も多くの人と共有できました。

もちろん、僕は松山でも半分は同じ道を辿り、半分は違った経験ができるものと期待しています。新しい環境は始まったばかりで、毎日が発見です。でも、人には見えるものが見えると言います。19年間の新潟の経験があるからこそ、松山で驚くことができるのです。本当に貴重な経験をありがとうございました。

それではまた会う日まで。

退任教員紹介



新潟大学理学部の更なる発展を願って

化学科 教授 橋本哲夫

新潟大学理学部に奉職してから31年余りになりました。その間に大学院に博士後期課程ができましたし、教養部の解体に引き続いて国立大学が独立法人化いたしました。理学部もそれらの変化に伴い自然環境科学科の新設が認められ、校舎の増築改修も行われ見かけ上は立派になったように見受けられます。

しかしながら、内面の学生の教育の充実と一体をなす研究分野は外見に見合うほどは充実してきていないのではないかと危惧を年輩者の一人として抱いて居ります。外部資金導入の少ない地方大学の理学部は独立法人化でますます研究資金が枯渇し、かつ多忙化が進み実質的には独自の研究を行っていない研究者も増加していないでしょうか。また、資金の豊富な研究機関や大学の出先機関で満足している研究者が理学部にも潜んでいないでしょうか。

新潟大学理学部が世界に誇りうる研究成果を出すには、他の機関に大きく依存するのではなく、古いかも知れませんが地道に自分の体と頭を使う実験研究が必要な気がいたします。学部生の4年以上の学生は先生方の背中を見て育ちますので、大変とは思いますが先生方は模範となるべく研究面で生き生きしなければならないと思います。

大学発展に貢献するため新潟大学理学部の学生が勤勉であることを今一度認識し、学生や院生の協力により新潟大学発の研究成果を絶えず出して頂きたいのです。言い過ぎかも知れませんが、研究活動が低調な理学部は大学にとって無用だと考えるからです。末筆ながら、今後の新潟大学理学部の、盛んな研究活動を伴った益々のご発展をお祈りします。長い間大変お世話になりました。



想いだすままに

化学科 教授 三沢正勝

この度本年3月31日をもって新潟大学を退職することになりました。定年まで2年残しての退職で、教職員の方々や学生諸君に迷惑をおかけすることになり大変心苦しく思っております。理学部化学科に着任してからちょうど14年になります。それ以前は大学附置研や大学共同利用機関にいましたので、着任の第一日目に、キャンパスが若い学生さんと賑やかな声で満ち溢れていることに強い印象を受けました。慣れない講義や教員としての日々に戸惑いと対応に四苦八苦しながらも、なんとかここまで来られたのも、同僚はじめ多くの教職員や事務職員の方々のおかげと感謝申し上げます。明るく元気で

頼もしい多くの学生さんに出会えたことも心から感謝しています。教える過程で逆にどれほど多くのことを学ばされたか計り知れません。教育と研究の両輪の大切さを改めて実感させられました。このような大学としての本来の良さが失われることのないよう願っています。末筆ながら、新潟大学の益々のご発展を祈っています。

※今号でご紹介できませんでしたが、数学科の浅野和雄講師も平成19年3月で退任となります。



新潟大学での10年間

地質科学科 教授 加々美寛雄

1997年に新潟大学に赴任してきましたので、ちょうど10年目で定年退職となります。大学院管理棟、理学部からの佐渡、日本海の眺めは良く、また国定公園に近接する環境も素晴らしい、10年が瞬く間に過ぎ去った感じです。前任地の岡山大学の固体地球研究センターは全国共同利用施設でしたので、新潟大学に来てからも表面電離型質量分析計を使っている共同研究が続き、そのため学外の沢山の研究者、学生の訪問を受けました。この分野での日本における研究拠点の一つになっていますが、これも地質科学科の先生方と大学院生の皆さんの協力があったからと、心から感謝しています。

固体地球研究センターの所属教員は学部の授業を担当する事はなかったので、少し戸惑った授業も最初はありました。しかし総合教育研究棟で行った授業(地学B:惑星と地球)は結構楽しくすすめる事ができたような気がしています。ただここ数年は新聞、テレビなどで報道されない惑星・衛星探査機が次々と打ち上げられるようになり、その探査機からの新しい情報を得るのが少し大変になってきました。

退職後は北アルプス、後立山連峰登山口の大町市に移り住んでいます。新潟では日本海の眺めを楽しみましたが、4月以降は北アルプスの山々の眺めを楽しみたいと思います。



40年を顧みて

自然環境科学科 教授 増田芳男

昭和42年の医学部助手を振りだしに、大学紛争の余波が残る昭和46年、五十嵐キャンパスに新装成った教養部に移り、23年間を過ごしました。そして、平成6年、大学設置基準の大綱化を受けて廃止となった教養部から理学部に移り、早くも13年が過ぎ去ったことになります。理学部では自然環境科学科の新設に関わり、学生諸君と一緒に「エネルギー・環境・社会」について学ぶ機会を得たことは貴重な体験でした。講義室、実験室そして設備もないいづくしの中で、新しい学科の教育研究を軌道に乗せるために大変苦労しましたが、今となっては懐かしい思い出です。

この40年の間に大学の「社会化」が進み、最近ではややもすると短兵急な成果を重視する風潮が強くなり、人材育成の面でも即戦力を求める声が強くなってきたように感じます。しかし、若い学生諸君には、狭い専門に凝り固まらず、広い視野を持ち、目先のことよりも物事をじっくり観て、よく考え、先を見通す力量を磨いて欲しいと願っています。澁刺とした若者と楽しく過ごすことができた幸せに感謝し、支えて下さった皆様に心からお礼申し上げます。今後は、一市民として大学の発展を静かに見守りたいと思います。



魅力ある新潟の自然にひかれて

自然環境科学科 助手 関谷國男

理学部は今、改修工事の真っ只中で、1,2ヶ月もするとびかびかに衣替え。

私が新潟大学に赴任したのはこの理学部が新築数ヶ月後のびかびかの建物であった。時の流れはこの建物の中にも刻まれていた。知り合いもいない孤独の中で理学部にはなぜか心から湧き出す夢と希望があった。学内には大学紛争の余波が残っていたが、新潟の自然環境はなぜか自分をひきつけてくれた。新潟の自然を素材にする研究者も多かった。

院生の時代はハムスター、マウスなど哺乳類を研究の対象にして細胞遺伝学の実験に精を出していたが、新潟では一転して両生類のカエルを用いて今までの実験解析に効率とオリジナリティを見つけようと夢を描いた。細胞培養の技術を導入し

アフリカのカエルで実験を進めたが利点もあるが欠点もあった。この壁を除くため日本のカエルを見直した。カエル天国の新潟には山も川もあり、広大な米どころ水田もいっぱいあった。

カエルの見直し後は、新潟近郊のアマガエルの染色体が正常個体と違う、佐渡に一歩足を入れると今まで見たことのないカエルが、しばらく丁寧に調べていくと新種のカエルと判明、佐渡でカエルの調査が続くと今度はカエルがトキの餌生物として調査の対象、等々。

研究の対象が実験室からフィールドに少しずつ移動したが、これは生物学科から自然環境科学科への移動にも関連していた。自然環境科学科の発展を心から楽しみにしています。

ありがとうございました。

新任教員紹介



新潟大学での統計科学

数学科 助教授 蛭川潤一

2007年1月に数学科に着任致しました。遅ればせながらご挨拶申し上げます。

早稲田大学で学部、大学院、助手時代を過した後、本学への赴任となりました。日本海側の気候は大変厳しいと聞き、覚悟をして参ったのですが、暖冬のためか、戸惑うことも少なく過しております。

本格的に学生に指導をするのは初めての経験なので、4月に向けて準備を整えているところです。専門は数理統計学で、特に、非定常時系列の漸近的推測の理論とその応用を主に取

り扱ってまいりました。

最近では、株価等の金融データへの時系列の手法の応用といったテーマにも積極的に取り組んでおります。二十一世紀は様々な分野で、数学の需要がますます増していく時代であると考えております。とりわけ、応用数学、統計数学といった学問が果たすべき役割はとて大きく、重要であると思います。

微力ではありますが、新潟大学での統計科学の発展に貢献できるよう情熱を注いでいきたいと思っておりますので、今後とも宜しくご指導のほどお願い致します。

卒業生からの言葉



浅川智之
(数学科)

～私の大学生活～

入学してから早4年、もう卒業!?といった気持ちです。入学した当初はこんな気持ちになるとは夢にも思わず、初めてのことに右往左往しながら過ごしていたのを覚えています。

私の学生生活はとても有意義なものになりました。勉学に勤しみ、多くのことを学び、サークル活動では、友人達と交流を深めたりと充実した毎日を過ごせたような気がします。

また、この4年間は今まで生きてきた時間の中でも特に初めてのことが多かったと思います。

例えば、1人暮らしをはじめたことや、車を運転したこと、国民年金の手続き、未成年から成人になり、お酒を飲めるようになったことなど、貴重な経験や思い出にあふれた時間となりました。

最後になりましたが、お世話になった皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。この4年間は生涯忘れようと思っても忘れられません。

どうもありがとうございました。



PHILIPP GUBLER
(物理学科)

～本質～

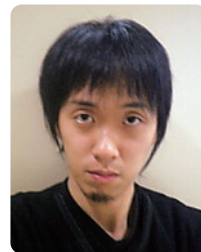
物理学科を今年卒業するスイス出身の留学生、Philipp Gublerです。

入学当初は永遠に続くと思っていた大学生活は今振り返ってみると、あっという間に終わったような気がします。

卒業は自分にとって1つの区切りであり、今まで一体何やってきたのかを考えるいい機会だと思います。私は入学のときに専攻として物理学を選びましたから、様々な方程式を学び、その方程式を物理的にどう理解すればいいかを勉強しましたが、その結果形として何か残っているかと言えば、ほとんど何も残っていません。本棚に並んでいる教科書と講義ノートぐらいです。しかし、物理学を通じて、複雑な現象からいかに本質的なことを見つけ出すかという考え方を身につけることができました。本質を探るということは物理だけではなく、あらゆる場面で非常に重要なことではないでしょうか。

この4年間で、私にとって印象に残っている思い出は同級生や先輩方とのときにはかなり激しい物理学の議論です。この議論を通じて、私に物理学の本当の楽しさを教えてくれた人達には心から感謝しています。

最後になりましたが、私はこれから大学院に進学し、「本質」をさらに求めていきたいと思っています。



木村 浩
(化学科)

～4年間で得たもの～

時の流れは速く、新潟大学での4年間の生活が今終わろうとしています。思い返してみると忙しい毎日でしたが、密度の濃い充実した4年間となりました。入学当初は、自分がイメージしていた『化学』と、実際に大学で学ぶ『化学』とのあまりのギャップに困惑するばかりで、好きで飛び込んだこの世界を次第に嫌うようになりました。結果、化学に対する興味を失っていったのですが、そんな中でも学友たちと出会い、互いに叱咤激励し合うことで幾多の困難も打破することができました。こうして生まれた絆はこの4年間で得られたかけがえのない財産であり、共に過ごした日々は良き思い出となっています。

そして、有機化学と出会ったことで再び化学に関心を持つようになり、有機研へ配属された今年は、朝から晩まで夢中になって実験に明け暮れる毎日を過ごしました。指導教官や先輩方にも恵まれ、研究者としての姿勢や技術を学ぶことができました。研究の奥深さと厳しさ、その中に突如として湧き出る興奮と感動、これらを体感できた私は幸運であり、この貴重な経験は私の将来に大きな影響を与えることでしょう。

春からは大学院に進学し研究生生活が続いていきますが、新天地で新分野への挑戦となります。不安は尽きませんが、この4年間で培った知識や経験を自信にして精進していきたいです。



高橋直哉
(生物学科)

～経験～

私は大学に入り生物学科で多くのことを学び、得ましたが、学科以外で得たものも多かったと思います。特に印象に残っているのは旅での経験です。

私は三年から四年に進学する際、休学してタイとカンボジアに行きました。そしてカンボジアで地雷博物館という所に偶然立ち寄ることになりました。その博物館ではスタッフとして地雷の被害を受けた人も働いていました。

カンボジアには今も地雷が埋まっており、犠牲者は増え続けているという事実を知ってはいましたが、私にとってそれは一つの知識でしかなく、どこかで他人事のように感じていたと思います。しかし、実際に地雷や、その犠牲者を見て、それが紛れもない現実であり、そこに住む人々にとって非常に深刻な問題であるということを実感しました。私はこの経験により、さまざまなニュースを知識としてではなく、より現実のものとして感じる事が出来るようになったと思います。

ここでは、学科以外での経験の一つとして、旅での経験を紹介させてもらいましたが、他にも大学では自分次第でいろいろなことを経験できると思うので、機会があれば、(学業に差し支えない程度に)いろいろなことに挑戦し、経験することもいいと思います。



村上龍太郎
(地質科学科)

～地質～

私が地質科学科に入学したきっかけは、高校生の時に鉱物に興味を持ち、大学で勉強したいと思ったからです。入学当初はきれいな鉱物を無作為に探すだけで見つからないこともありましたが、しかし、探し続けているうちに鉱物はある法則に従って見つかることが分かってきました。その法則が地球という果てしなく大きく得体の知れないものの謎を解明することと深く関係していることも分かってきました。それがまさしく地質学という科学に触れた瞬間でした。論理的に考えないといつまでも鉱物を見つけることはできません。言い換えると、鉱物を論理的に考えて見つかることで地球の謎を解明する過程の第一歩を踏み出したのだと思います。

現在私は、オマーンの地質を研究しています。そこは海洋プレートの断片を数100kmのスケールで観察できる場所です。それを研究することで地球深部にあるマントルの挙動を知り、地球の謎を解くことができます。

私は大学生活の4年間で論理的に考え、行動することの必要性を学び、実行する努力をしてきました。しかしながら完璧というには程遠く、依然として未熟です。今後も研究を通して論理的に考え、行動する努力を続けていきたいと思っています。



渡邊拓哉
(自然環境科学科)

～知ることより考えること～

私の大学生活は人に恵まれ、非常に充実したものでした。その中で最も学んだこと、それは「勉強の仕方」でした。

大学入学当初、私は参考書の内容を理解せずに鵜呑みにしていました。参考書に書いてあることは絶対正しいと信じて内容を鵜呑みにするのは、楽だし分かったような気になるのです。当時は友人に質問されると「だって参考書に書いてあるもん」と答えていたほどです。当時の私は科学をやる人間には特に大切な「なぜ」を蔑ろにし、自分の頭で考えることをしていませんでした。その意味で思考の自立ができていませんでした。

しかし、ある時ある先生からこのような厳しい事を言われました。「思考の自立ができていないと、真に理解ができない。理解できていなければ人に物事を説明できない。物事を論理的に正確に相手に理解してもらるように説明できなければ、無知であるのと変わらない。」

その言葉に非常にショックを受け、それ以来「なぜ」を意識するようになりました。自分の頭で考えるのは正直、面倒だし解決できないことの方が多いのですが、解決できた時の喜びはなかなかのものでした。その喜びを知る機会を与えてくださった全ての方に感謝を述べたいです。

理学部改修工事進む

平成18年9月、理学部A棟の改修工事が開始され、続いてB棟、C棟の改修が行なわれています。A、B棟は、耐震補強とアスベスト除去および内装工事が行なわれます。C棟は、内装工事のみの改修です。

理学部校舎が改修され、教育・研究環境が整備されていくことは大変喜ばしいことです。しかし、工事に伴って、講義室や研究スペースが大幅に減少し、学生諸君や教職員の皆様にご迷惑をおかけしていることを心苦しく思っています。

この改修により、講義室、ゼミ室が主としてB棟に集中されます。また、B棟の玄関が整備され、それに続いてロビーが新たに設けられます。そのロビーの向側に学務系の部屋が移されますので、学生諸君にとって使い易い空間が出来上がるものと期待しています。さらに、A棟3階に就職資料室と休憩室、また1階には展示室が設けられますので大いに活用して頂きたいと思っています。

改修工事は、3月末に完了する予定になっています。新しくなった理学部に新入生を迎えることができることはうれしい限りです。

残されているC棟の改修が一日も早く着工されることを望んでいます。

(建物委員会委員長 檀上 篤徳)



卒業生アンケート

理学部では、教育改善をはかる上での基礎資料を得る目的で、定期的に、卒業生を対象とした学部教育アンケート調査を行っています。調査結果は理学部ホームページ(教育活動-教育改革取り組み)をご覧ください。

<http://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/kyoiku/kaikaku.html>

(点検評価委員会委員長 和田 清俊)

新潟大学理学部卒業生を対象とした
学部教育アンケート調査報告書

2006年3月

新潟大学理学部点検評価委員会

これからの
行事予定
(平成19年度前半)

4月 5日(木)	入学式
4月11日(水)	授業開始
4月21日(土)	黎明祭
8月 6日(月)	学部学科体験
8月 7日(火)	オープンキャンパス(理学部説明会)
8月11日(土) ～9月30日(日)	夏期休業
9月上旬	第3年次編入学試験

理学部ホームページ

<http://www.sc.niigata-u.ac.jp>